

Title	J・S・ルーセック編 『現代の政治的イデオロギー』
Sub Title	Joseph S. Roucek (ed.) : Contemporary political ideologies
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1961
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.34, No.11 (1961. 11) ,p.114- 118
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19611115-0114">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19611115-0114</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

によるものではなく、著者の現實の體驗、具體的事例の分析、統計などを根據とする極めて實證的な検討の結果であり、そのために明解で理解し易いとともに讀者に強く訴えるものがある。もつとも農業法人に關する諸問題は、はなはだ多種多様であり、また日日新月异いものが發生するので、本書ももつとそれらすべてのごとを説きつくしているわけではない。例えば零細農を含む共同化法人の組織、運営とか、特殊法人の構想とか、構成員の種類等については、近き將來において著者のより詳細な研究が發表されるのを期待しなければならぬ。

ともかく本書は、今まで見て來たように、農業法人問題を中心としながら、現在の日本農業および農民が直面する諸問題をば、實證的に明解に説明し、その解決方向を指示するものであり、研究者はもとより一般の方々にも、ぜひ讀まれるよう希望して筆をおく。

(株式會社新評論刊 定價四五〇圓)

(宮崎俊行)

Joseph S. Roucek (ed.):

### Contemporary Political Ideologies

New York, Philosophical Library 1961, X+470 pp.

J・S・ルーセック編

### 『現代の政治的イデオロギー』

本書は現代の政治的イデオロギーのモザイクである。マルクス主義からアメリカ的イデオロギーまで、多種多様な思想と運動が並べられている。各々はむろんすぐれたモノグラフ的價値を有しているが、研究方法として統一があるわけではなく、分析的というよりむしろ敘述的なものが多い。D・N・ヤコブスの「チトー主義」、C・R・ラベルの「南アフリカの人種理論」、C・ウイリアムスの「汎アジア主義と汎アフリカ主義運動」などはなかでも特異な、すぐれた分析として注目されるであろう。

冒頭のC・ツインメルマンの論文「イデオロギー運動と社會變動」は、二十世紀の社會學的性質を解明したものである。それは間もなく刊行を豫定されている『變動の社會學』の摘要である。かれ

の議論はけつして新しいものではない。かれはまず、もつとも一般  
的な社會學的原理として、「社會變動が最大である時期、あるいは變  
動への要求が最大である時期には、もつとも多數の、そしてもつと  
も騒がしく奇妙なイデオロギー運動がおこる」とし、社會體制内部  
の變動とそれに結びついたイデオロギー運動の新しい社會的統合、  
もしくは再統合への企圖とが相關的であることを指摘する。二十世  
紀の社會變動は、かつてのヨーロッパの五・十二・十六世紀のそれ  
とパラレルであり、まさしく「偉大なるイデオロギーの世紀」(the  
Greater Ideological Centuries)と、いう範疇に屬する。

ツインメルマンによれば、二十世紀の地すべりの社會變動は、(1)  
領土支配權の變化、(2)社會階級構成の變化、(3)物理空間における變  
化、(4)農夫の自覺的擡頭、の四つによつて特徴づけられる。最後の  
特徴について附言すれば、農夫、“fallehen”——オスワルト・シ  
ュペングラ―が『西歐の没落』のなかで用いた——とは、近東にお  
いて教育のない、農業によつて生活をたて、過去の廢墟の傍らで細  
々と土地を耕しながらも、古代の偉大さをすこしも意識せず、こ  
してきた農民階級を意味する。しかしかれらはいまや立ちあがり、  
新しい全體的表象のもとにイデオロギー運動を展開しつつある。汎  
アラブ主義はその一例であろう。中世期の終りにかつての西歐の偉  
大さを意識してジョン・オブ・ソールズベリ “We Are But

Dwarfs On The Shoulders Of Giants” というイデオロギー  
的スローガンをかかげたが、中國、東南アジア、インド、アラブの  
人びと、アズテック、マヤ、インカの遺跡に住む人びとも、それと  
同じ感情を抱いている。このような觀念は、巨大な遺跡をもたぬア  
メリカとロシアにも定着しているのである。かれらはそれを歴史的  
源泉からではなく、科學の創造性からえている。アメリカとロシア  
はそれ自體で、巨大なイデオロギー運動となつてゐる。

このような社會變動によつてもたらされた社會學的問題狀況は、  
現代世界の人類に對し最大の危機と最大の可能性とを提示してい  
る。二十世紀の今後の課題として、結局、ツインメルマンは新しい  
リーダーシップと新しい社會科學の必要性を強調する。後者につい  
て、かれはアメリカ社會學の形式主義、機能主義、社會行爲理論に  
批判的である。社會體系の枠組を組みたてることは、椅子は木でで  
きていて、四本の脚があり、それにすわる機能をもち、すわれなけ  
れば機能しえない」というのと同じである。新しい社會科學の創造  
はこれからの問題であるが、それは(1)あらゆる種類の人間性を尊敬  
し、(2)社會變動の研究に重點をおき、(3)新しい倫理をもち、(4)ルネ  
ッサンス以來人間がおかれてきた自然の範疇から人間をとりだし  
て、神聖なるものの範疇に入れる、という學問的作業をつづけるべ  
きことが示唆される。

以上のツインメルマンの枠組は、本書の研究の枠組をなすものではない。各専門研究者は、現代のイデオロギーの主要類型を分擔執筆している。

(1) マルクス主義の變型と新マルクス主義は、ソヴェティズム、中國共產主義、ソヴェト衛星國、チトー主義を含む。ソヴェティズムの論述は、ソヴェト體制の機構の側面を中心とし、マルクス・レーニン主義の理論的問題については觸れられていない。中國革命については、その具體的・客觀的條件との對應においてユニークなイデオロギー的表現をとることが示される。共產圏のうちで衛星諸國のイデオロギー問題は、一九五七年十月のモスクワ宣言によつて、修正主義との鬭争、とくにその反ソヴェト的傾向に對する彈壓として、今日一層深刻化されている。ハンガリー、ポーランドをはじめブルガリア、チェコとクレムリンとのイデオロギー的關係は微妙である。チトー主義は、民族化された國際共產主義、ユーゴの背景、モスクワとの決裂、内部的・外部的・イデオロギー的調整、ソヴェト方式の誤り、ユーゴ的解決——國家および黨の消滅に關する理論、社會主義への途、マルクス主義の現代的適用をめぐる理論鬭争、將來の展望——革命と進化、の分析スキームがもちいられている。

(2) 社會主義の殘瀝は、社會主義インターナショナルと大陸社會主義、イギリス社會主義を取扱つている。ここではヨーロッパ社會主

義の現代的傾向が考察されている。ドイツ、オーストリア、イタリア、フランス、スカンディナヴィア諸國の社會主義政黨の特徴をみると、一般的にマルクス主義的イデオロギーの格下げがおこなわれている。すでに西歐の社會主義者はマルクス的用語で語ることをやめ、過激な行動をひかえている。かれらは新しい哲學的目標を探究し、社會主義の現實的内容と意味を再評價しなければならない立場にある。「西歐では社會主義は神話ではなく、現實の一部となつた」(R・フロン)が、同時に「理論のない社會主義は稀薄化され、生氣を失つている」(P・ラダミエ)。イギリス社會主義については、その思想的背景をたどり、一九四五年アトリー内閣實現まで、労働黨の發展史が示されている。

(3) 新しい民族主義、植民地主義、汎思想運動の部分では、非西歐的世界において展開されつつある多彩なイデオロギー運動が取扱われる。すなわち、岐路にたつ植民地主義、シオニズム、南アフリカの人種理論(アパルトヘイト)、汎アジア主義と汎アフリカ主義運動、ラテン・アメリカ(反アメリカニズム、マルクス主義、カトリシズム、メキシコ革命、ベルーのアプリスモ、アルセンチンのペロニスモ、ウルガイのバットリスモ、ボリビアの國民革命運動)。これとくに興味をひくのは、汎アジア・アフリカ主義の評価である。これらの運動の重要性は西歐の世界で充分理解されていないが、より

重要な事實は、《誤解》はまつたくの誤解なのでなく、完全によく理解したことを許容するのを拒む態度にある、といわれる。汎アジア・アフリカ主義運動は、人種主義的イデオロギーに對する人種的叛逆であり、白人支配に對する復讐の意味をもっている。アジアにおける外國勢力の驅逐のための日本のリーダーシップは、眞珠灣攻撃というアジア人のためのアジアの最後の暴舉に歸結した。日本帝國主義は西歐帝國主義の創造であつた。そしてまた中國の共產主義化については、中國は西歐支配からの解放を求めたのだとし、もし中國が他の民族と平等な立場に立ちえたらば、どのような思想へも轉化しえたであらうといわれる。赤色中國は西歐の愚昧さの創造である。それこそ愚にもつかぬ假定であるが、世界民族の精神的平等への約束は金で買えるものではない。非西歐の世界において、共產主義がルーブルも使わずに勝利し、アメリカが何十億ドルもつきこんで敗北する理由——もちろん單純化しすぎた議論であるが——は、精神的要因によるところが大きい。『共產黨宣言』より一層強力な、そして誠實な『信念と行動の新しい西歐的宣言』が要求され、精神的・道德的投資が必要とされるゆえんである。

(4)新しい民主主義は、フランス第五共和國、ドイツの復興、再生したイタリア、オーストリアの生存、日本の諸改革、インドのガンジー主義についての論文より成る。ヨーロッパ各國については、戦

後の政治史、政黨を通じてイデオロギー的狀況が輪廓づけられる。

民主主義の安定という觀點からは、フランス、イタリアはそのイデオロギー的分裂化傾向のために、苦惱しつづけている。イタリアの政情は、カトリックの支配的な國であるにもかかわらず、共產黨が優勢であるという近代史の奇現象を呈しているが、キリスト教民主黨の教權主義に對して、共產黨が教皇國家 (stato pontificio) を阻止する自由主義的機能を果しているのも皮肉である。オーストリアにおいては、そのオーストリア・マルクス學派の理論的傳統をひきながらも、そのイデオロギー的ロマン主義は色褪せて、社會黨と國民黨との連立内閣がつづいている。西ドイツのドイツ社會民主黨も一九五八年以來修正主義的傾向を示している。キリスト教民主同盟の現實主義的政策は、キリスト教倫理、エアハルトのネオ・リベラリズム、福祉國家的實踐とあいまつて、新しい *Wirtschaftsbürger* の社會的市民像の目標をめざしている。戦後日本については政治的イデオロギーとして、保守主義、自由主義 (社會主義思想)、共產主義が論じられる。なお社會的イデオロギーとして、婦人の不貞とかパチンコの氾濫、ヌードやストリップのテレビ番組までが書きたてられている。インドについては、ガンジー主義の暴力否定 (Ahimsa) のサンスクリット概念を中核として、インド的精神風土の思想と行動が述べられている。

本書の最後の部分は、「アメリカの福祉國家——イデオロギーに  
あらずニートピアにあらず——」である。それは、アメリカの危機

なハインツ・ユローの言葉は、イデオロギー研究に對して、イデ  
オロギーの終焉を告げているかのように思われる。

(一九三二—四〇年)におけるニュー・デイル政策の實踐を中心

(奈良和重)

としたハインツ・ユローの論稿である。かれはニュー・デイル  
はイデオロギーでなく、「イデオロギー的コミットメントから自己  
を解放しようとする不斷の努力」であると力説する。それは信仰で  
はなく行動であつた。十字軍でもなければ實驗でもなく、大衆の叛  
逆でもなく、それこそ充分な政治的フィード・バックであつた。ル  
ーズベルトはカリスマ的指導者ではなく政治家であつた。われわれ  
はイデオロギー的デイコトミー的思考を止めなければならない。T  
VAは社會主義的企てであつたが、それとともに素晴らしい私的企  
業の繁榮でもあつた。もしもニュー・デイルがアメリカ史の記憶  
にとどめられるとすれば、それはイデオロギー的暴力によつてでは  
なく、政治によつて問題を解決した國民の政治的成熟とその能力の  
發揮によつてである。イデオログやニートピアンは非政治的で、  
責任のない子供のようなものである。成熟ということは、自分の要  
求を行動と認識の唯一の基準とするのではなく、つねに他者と對應  
していく能力である。それは他者の正當な利害の承認を含み、調  
整、妥協、統合をともしなり。それゆゑ成熟した政治とは、政治的精  
神をよく心得たものの強靱な態度をあらわすものである。このよう